

# ようやく「背の高い移動性高気圧」に覆われダクト発生！

2005年4月9日 JG0TEV 中村

上海出張帰国当日の4月9日～翌10日にかけて、背の高い移動性高気圧に伴うダクト発生によるオープンが確認されました。ここに気象解析による裏づけ確認を行います。

## ダクト発生によるオープン情報



JO7IZC須藤さんからの情報・・・

9日20時頃から10日11時頃まで、7エリアからは4エリアまでのオープンでした。

21:20 JM4KBL(鳥取県西伯郡)-JO7IZC(秋田県由利郡)  
お互いにスケールアウト  
JM4KBL 0.7w-JO7IZC 0.6w にてRS 57-58。

21:27 JM4KBL(鳥取県西伯郡)-JG7EOC(山形県鶴岡市) RS59-59

0-9は7からは、厳しかった。

今回のダクトは、今までとはかなりパターンが違っていったような気がしました。

## 気象解析

地上天気図から、本州付近は移動性高気圧に覆われたことがわかります。

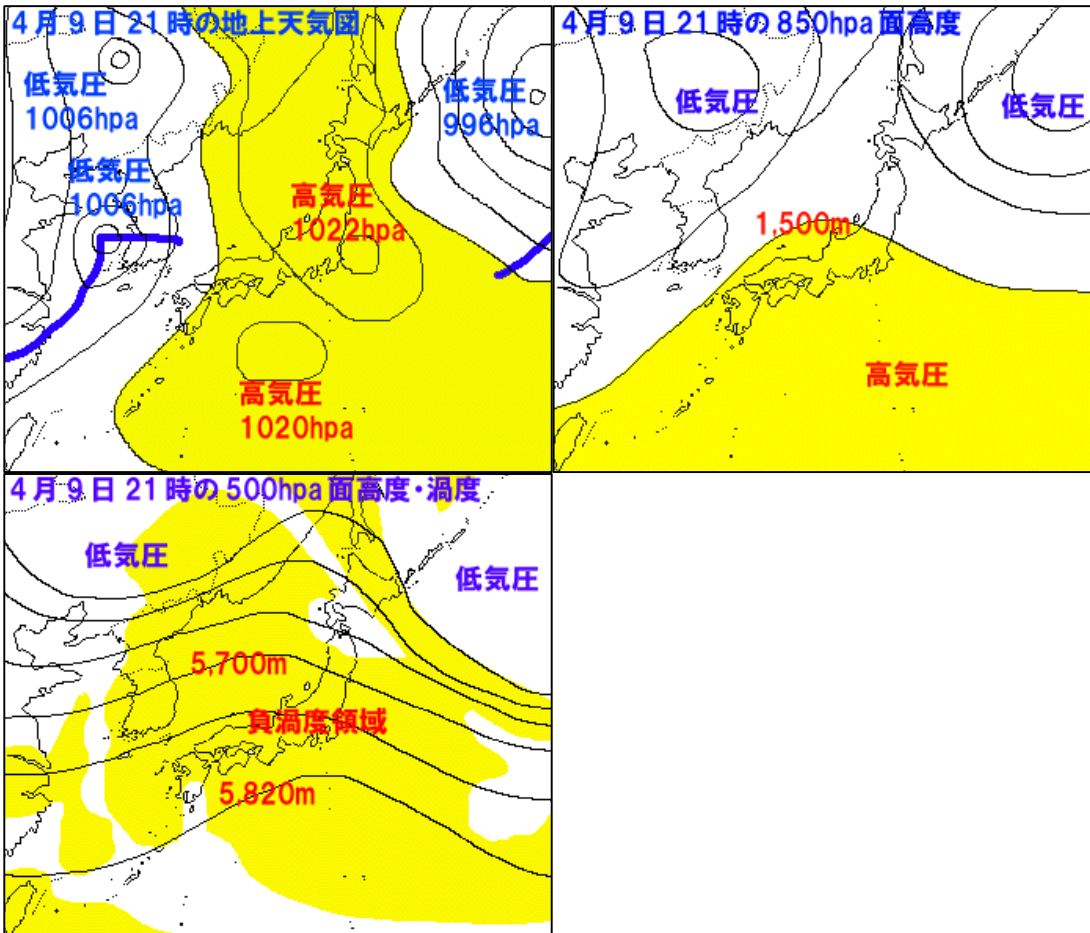
この高気圧について詳しく解析します。

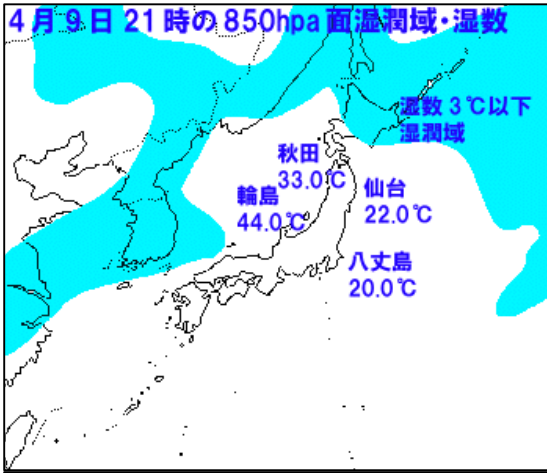
850hpa面の1,500mの等高線は本州の日本海沿岸まで北上しており、本州付近にはリッジが見られます。

さらに500hpa面の5,700m等高線は日本海中部にまで達しており、日本海には明瞭なリッジが見られます。

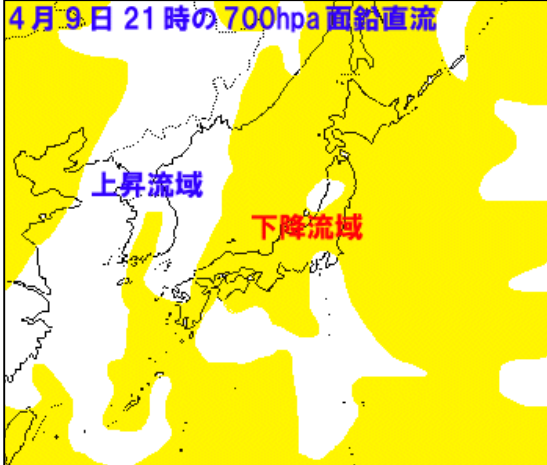
これに伴い、日本付近は広い範囲にわたって負渦度領域に覆われていたことがわかります。

これらの解析結果から、移動性高気圧は背の高い高気圧であったと判断できます。

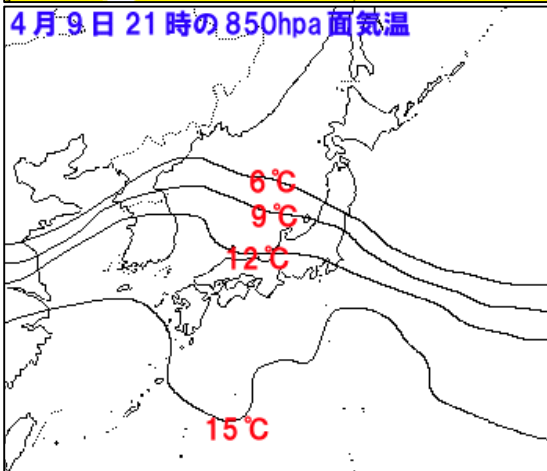




上空の空気について解析すると、850hpa面湿潤域、湿数から東日本の上空を中心に湿数20以上の乾燥空気が流れ込んでいたことがわかります。

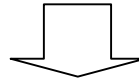


また、この乾燥空気の広がりにあわせるように700hpa面の下降流域の広がりが解析されます。



最後に、850hpa面の気温について解析すると、輪島付近上空で約9、秋田付近上空では6と低いことがわかります。

このため、ダクトが発生しやすい気圧配置になっても実際にダクトが形成されるまでには時間がかかることが容易に理解できます。



今回のダクト発生によるオープン現象の確認は気温の上昇しやすい日中ではなく、9日の夜間になってからようやく現れたことから理解できます。このダクトは天気が崩れる翌日の午前中まで形成され続けました。

このような諸条件によって、「応答速度の遅いダクト」が形成されたものと考えます。